「防災まちづくり・くにづくり学習」のススメ

～「国土強靱化」と，子供達への学校教育～

京都大学大学院教授・内閣官房参与　藤井聡

「私たちの暮らしの環境を整える」という営み（土木）

私たち人間は他の全ての動物と同じように自然に手を加え，暮らしの環境を，住処を整えないと生きていけません.「住処」がないと生きていけないというのが人間です．そしてその暮らしの環境を整えることを「土木」と言います．これが一番広い土木の定義じゃないかと思います.

土木，つまり，「私たちの暮らしの環境を整える」ということは，例えば，町や道，堤防，ダムをつくったりすることです．あるいは，先日（平成 26 年 8 月の）70 名以上もの方々がお亡くなりになった広島の土砂災害について言うなら，砂防ダムが 8 ヶ所あったのですが，それらは全て土砂を止めて，下流側の命と財産を守りました．一方で，9 ヶ所の砂防ダムの建設が予定されていたのですが，つくられてはいなかった．その 9 カ所の全ての地点では，残念ながら土砂災害で甚大な被害が出てきてしまったというのが事実です．こういう事実を踏まえますと，砂防ダムをつくる，という取り組みが無駄であると，一概に切って捨ててよいものであるとは，当然いえないということになるのではないかと思います．いずれにしても，こうした取り組みもまた，土木の取り組みとなります.

あるいは災害に備えたり，自然を守ったり逆に自然を守るということもまた，私たちの暮らしの環境を整えることの一環ですから，これもまた「土木」の取り組みだということになります．例えば今回の土砂の災害を防ぐためには，実は上流側の山をしっかりと林業で守っていくと，土砂の流出量が減ってくるということもございますが，こうした「自然との共生」を踏まえた環境整備もまた，土木ということになります.

子供達の教育のなかで，一番足りないのは「土木の視点」である.

そして，今，わたしは，子供達の教育のなかで，一番足りないのは「土木の視点」，つまり，「自分達の力で，自分達の暮らしの環境を整えていく」という視点なのではないかと，感じています.

わたしたちは，生まれ落ちた時にすでに，そこには大人達が，あるいは先人達がつくった「暮らしの環境」が与えられていました．それはさながら，天が与えたような，つまり，人がつくったのではなくて天が与えたような，空気のような水のような存在として，私たちの暮らしの環境というものを認識してしまっているのではないかと思います．そんな風にして，先人達がつくりあげた「暮らしの環境」を，当たり前のものとして考えている子供達，そして大人達が現代においては大半ではないかと思います.

そんな風な感覚を現代人が皆持っていたとしても「何の弊害」もないのならばそれでいいのかもしれません．しかし残念ながら，そうはいきません．「暮らしの環境がそこにあるのは，当たり前だ」と考える大人，子供が増えてくるとどうなるかというと，自分たちの「暮らしの環境」に「手を入れる」ということ，「メンテナンス」というものを，全くやらなくなっていってしまいます．もちろん，先人達は，「暮らしの環境に手を入れる」という事を，ずっとやってきたわけです．ですが，そうした先人がやってきた取り組みをしなくなって、現代人が，自分達の環境を「ほったらかし」にして，何の手入れもしなくなってしまうと，「暮らしの環境」はどんどんどんどん劣化していってしまいます．そして，結局，わたしたちの命や財産をまもれなくなっていってしまいます．その結果，私たちの豊かさがどんどんなくなっていってしまうのです．

「暮らしの環境がそこにあるのは当たり前だ」と皆が感じれば，環境をほったらかしにすることとなり，結果，どんどん環境が劣化していって，私たちがどんどん不幸になって，その内，存続できなくなっていってしまう――そういう構造が，この現実の世界には明確に存在するのです．そして，今の学校教育の中でこういう暮らしの環境を整えるという視点がどこまであるのだろうかと考えると，不十分ではないかということが，これまでの「教育学」の中でも，指摘されてきているのです．

これが，『子供達の教育のなかで，一番足りないのは「土木の視点」である.』という言葉の意味です．

「防災まちづくり・くにづくり」とは何か？

こうした思いで，これまで土木学会と教育学会が互いに協力して，小中学校等で土木について学ぶ「土木学習」のあり方を考える「土木と学校教育フォーラム」を，毎年開催して参りました．今年は，その６回目となります．

そして今回は特に，防災まちづくり・くにづくりに関してのテーマをとりあげます．防災まちづくり・くにづくり学習というものは，要するに，今年平成 26 年の 8 月の広島の土砂災害や，2011 年の 3.11 の東日本大震災，あるいは，その前の阪神淡路大震災や，中越地震，さらには来るべく首都直下地震や富士山噴火，等々の，様々な自然災害の危機に対して強いまちをつくっていこう，そういう災害に対応できるようなまちに，私たちのまちを作り替えていこうという「防災まちづくり」，そういうものを「学ぶ」ということであります．そして，防災くにづくりというのは，そういう災害に対応できるような国につくりかええていく，ということであります．

そもそも私たちの暮らしというのはですね，陰に陽に，潜在的に顕在的にですね，何かの想定のもと，つくりあげられています．

例えば伝統的な家屋というのはどこの地域にいっても屋根が大きく違います．屋根が全然違います．雪国に行くと屋根が急峻であります．雪国でないところは屋根が普通の，急峻ではない屋根になります．そして台風が来る地域になると，屋根はフラットに近くなっ

てきます．これはなぜかと言うと，フラットに近くしないと屋根が飛んで行くからです．そして，台風が本当によく来るところになれば，屋根は完全にフラットになり，かつ，瓦を屋根におかないようになっていく．台風が来れば，瓦が飛ばされてしまうからです．

つまり，家屋というものはその地域，その地域の自然環境になじんだような屋根になっているわけです．自然と対応するような格好で屋根の形，構造がつくりかえられているということです．これは1つの小さな象徴でありますが，そういうことで社会のあり方そのものが，全然変わったものになるのです．つまり，自然の状況，どんな災害がおこり得るのかということで，私たちのくにとか，まちは全然変わってくるわけです．

例えば繰り返し繰り返し津波が来るようなところでは皆さん高台に住むこととなるでしょう．洪水がすぐあるようなところではそこでもやっぱり高台に人が住むでしょう．あるいは土砂災害が繰り返し起こるようなところでは，人々が住まないようになっていったりします．そんなかっこうでですね，自然の環境に，私たちの社会，町，国というのは，長い時間をかけて「馴染んで」行くようになるのです．そうやって，自然に「馴染んで」いくようにしてじ徐々に作りあげられていく様になった社会こそが，「伝統社会」と呼ばれるわけです．

こういう事を，2000年間とか3000年間，場合によっては10000年とか20000年の長い歴史の中で繰り返して，さながら私たちが進化していくように，そういうように社会とか国とかがつくられてきたのですが，残念ながら18世紀や19世紀の近代国家ができ，近代文明，産業革命が起こってからですね，自然に基づいて国とか町とか文化をつくるようになって，頭が悪い癖に，その「悪い頭」を使って，つまり，人間なんてあほなくせに，単なる自分の「思いつき」程度のもので，この国とか町とかを「つくる」ように「なり下がった」のですね，我々は．

これはもう進歩したのではなくて「退化」したのだといえるでしょう．

産業革命で我が人類というものは退化してしまったのだ，というふうに言ってもいいと僕は思います．

このような構造の中で今回のような事故とか3.11というものがたくさん起こってくるようになってきたという構造があります．

すなわち，この状況の中で，今なんで私が申し上げたのかと言うと，南の方でも土砂災害の被害があったり，危ない所に人が住んだりという構造に今の社会はなってますよね．自然となじんでないような国とか町とかが近代という時代においてできちゃったわけです．そういう脆弱な社会をつくっちゃったわけです，たったこの数10年という短い間に．

たったこの短い数10年の間にこんな危ない町とか国に，我々は自分の町や国をつくり替えてしまったのです．

それをもう一度，もう一度昔のようにつくりかえようじゃないかと，そして，それを通して，自然とともに共生できるような町とか国とかそして人間になろうじゃないかという

のがこの，防災まちづくり・防災くにづくりの基本的な考え方であります．

さて以上の考え方に基づいた，行政の取り組みが，今まさに，政府の中で進められています．本日，冒頭にご挨拶頂いた福井照先生，そして，自民党の調査会で会長をお勤めの二階先生等の先生方のご采配で進められている「国土強靱化」という取り組みですが，これは，別の言葉に言い換えますと，まさに，今申し上げた「防災まちづくり・防災くにづくり」ということになります．

「強靱化」というのは要するに，今あるシステムを質的に改善して，何が来ても大丈夫な「強靱」なものに作り替えていく，強くしなやかにしていく，ということです．そして，この国土強靱化というのは哲学的な視点から申し上げると，今みたいな話になっているということであります．その中で，政府でそういった取り組みをやっているのですが，これを是非子供達に教えていく，つまり，この防災まちづくり・くにづくりというものの学習を，小学校中学校高校で進めていくことが必要ではないかと思います．特に今，子供にとって一番足りない要素は「土木の視点」であるという点を踏まえるなら，とりわけこうした学習は重要であると思います．

「防防災学習」の目標

さて，以上の議論をさらに教育的な側面に落とし込んでいくとどうなるかという事を，次にお話いたします．

授業のあり方を考える上で教育界の先生方にご教授いただいたのは，学校教育というのは「目標」と「内容」と「方法」の３つの要素を特定することで初めて，授業，カリキュラムを組み立てることができる，という点です．

防災まちづくり・くにづくり学習の「内容」はもちろん，「防災まちづくり・くにづくり」であり，それについては，今，申し上げた通りでありますので，ここでは特に，「目標」と「方法」のあらましについて，お話したいと思います．

ここで防災教育と防災まちづくり・防災くにづくり学習とを分けて考えたいと思います．広く言いますと，防災教育というものの中に防災まちづくり・くにづくり学習というのがあるのですが，これまでの防災教育と，今ここでやろうとしている防災まちづくり・くにづくり学習とはどう違うのか，ということをお話したいと思います．

まず，「狭い意味での防災教育」を考えます．この「狭い意味での防災教育」の目標というのは，まず，災害に対して何もしなければ，自分が死んでしまうということを学ぶ事を通して「生きるためには，必死さが必要だ」という事を，肌感覚で学ぶ，そしてそれらを通して，「生きる力を養う」というものです（図１参照）．

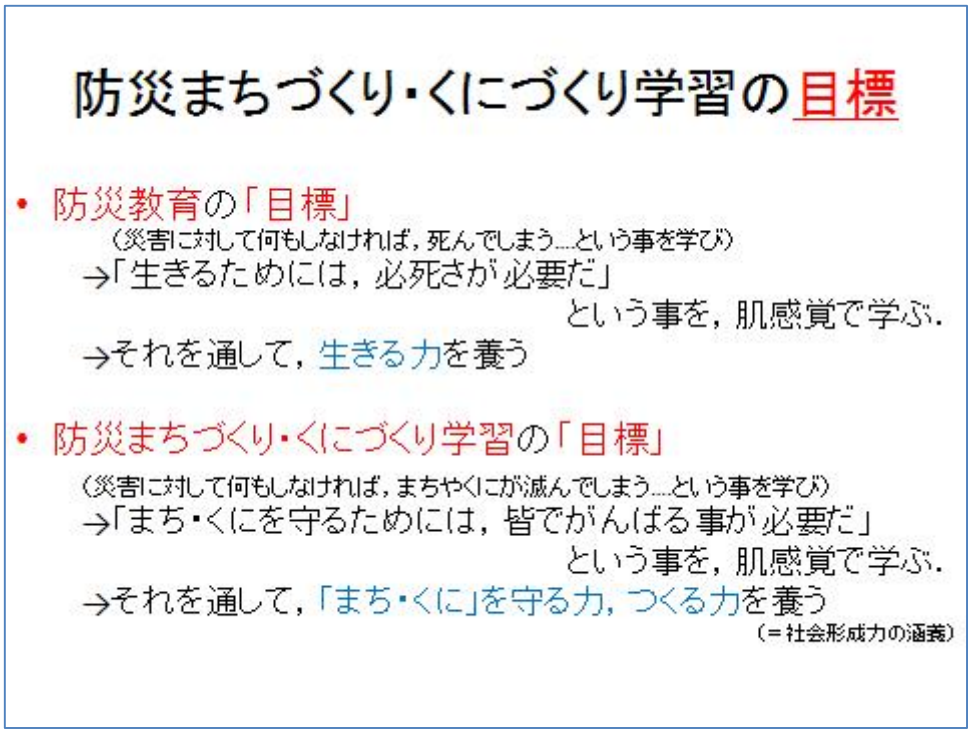

図１　防災教育，防災まちづくり・くにづくり学習の「目標」

例えば，群馬大学の片田教授が，釜石市の学校の生徒達に徹底的に防災教育を重ねた事を通して，大半の生徒達の命を救ったという「釜石の奇跡」と呼ばれる事例がありますが，この事例は文字通り，こうした目標を掲げた防災教育だったと言うことができるのではないかと思います．この事例では，片田教授は，釜石市の子供たちに「津波が来た時に何もしなければ死んでしまう」という事をずっと教えていった訳です．それがこの事例の全ての出発点だったわけです．

そして，それを教えた上で，片田教授は，ハザードマップの情報すら信じず，ひたすら「必死」で，高台に逃げていくことを教え込みました．そしてそれが功を奏し，たくさんの子供達の命が救われたのでした．こうした事を学んだ子供達は，この津波のみならず，さまざまな状況下で，あらゆる事を想定しつつ，その中で，その瞬間瞬間にできうる事を全てやりきる「たくましさ」を学んだに違いありません．

いずれにしても，これが人間にとって一番大事なポイントだと思います．これは防災という問題を越え．人間として生きる上で一番大事なのは，「何もしなかったら死ぬ」ということを理解することを示唆しているのではないかと思います．残念ながら，現代人達は，これを理解していない人が多いのではないかと思います．何もしなかったら死ぬ，というのは，当たり前のハズなのに，いまでは，この感覚が忘れられているのです．

ちなみに，これを昔の人は知っていました．江戸時代の人は飢饉があったら，死ぬ，という危機に常に直面し，そしてそれを知っていました．だから漁に行く前は神社に拝んで

から行ったりとか，あるいは，お百姓さんとかは，冷害や干害，洪水が起こらない事を祈ったのです．なぜなら，太陽が照らなかったり，洪水が起こったりすれば，米がなくなって死んでしまうからです．

つまり，彼等は，人間というものは実に簡単に死ぬんだと分かっていたのです．だから，そんな中で，人は必死で生きていかなければならない，という緊張感を携えながら生きていたのです．

だから，例えば万葉の時代は，言葉一つでも，言葉一つでもですね，命を奪うということがあるかもしれないという緊張感あったありしたのです．万葉の時代は人の名前すら呼ばなかったそうです．人の名前を，例えば，「藤井君！」なんて声をかけるだけで，藤井君の命を奪ってしまう程の霊的な力がその名前を呼ぶ言葉にはあるのではないか....そんな責任感，緊張感の下，言葉をつかっていたそうです．

要するに，私たちの命は，いとも容易く失われてしまう，という考え方がかつては当たり前だった，そしてだからこそ，何もしなかったら死ぬ，ということをかつての人々は理解していた．しかし，現在の多くの人々はそれを理解していない．

ただし，こうした感覚，何もしなければ死んでしまう，という感覚が，人間の人生において一番大事なことなのではないかと思います．

でもこれは，なかなか教えられるようなモノではない．

だけど，「防災」を学べば簡単に理解できるのです．「あっ，何もしなかったら津波で死ぬんだ」「あっ，土砂災害が来たら死ぬんやだ，逃げなかったら死ぬんだ」と，肌で，スグに，分かるのではないかと思います．これを理解するってことは，「あっ，俺って，限りある命を持ってる，生き物なんや」っていうニュアンスを理解すること，です．

これを理解できた子供は「生きる力」がすごく身につくはずです．

要は生きるというのは死の逆ですから，死を理解することで生きるということの輪郭を理解できるわけです．死を知る事で，かえってくっきりと生を理解することができる．

したがって，「何もしなかったら，死ぬ」ということを理解すれば，それを通して逆に，「死を跳ね返していかないといけないんだ」という様な意識へと近づいていくことになるのです．

ところが死ぬってことを分かってなかったら，生の中ばっかり見て，生と死の境界が何も分からなくなる．かくして，生の活力がますます減退していくことになる――そんな構造があるんだと思います．そして，そうした構造があるからこそ，死ぬ可能性を赤裸々に描写し，かつ，そこで描写される死を跳ね返していこうとする力を育む事が，「防災教育の目標」なのだと思います．

かくして，現在の文部科学省の防災教育の取りまとめ冊子でも，「生きる力を育む」ということが目標になっているのだと思います．今，哲学的に視点からお話した事を背景として，そういう目標が掲げられているということだと思います．

「防災まちづくり・くにづくり学習」の目標

さて，引き続いて「まちづくり・くにづくり学習」について，お話したいと思います．

この図１にまとめましたように，その目標は，次の様なものではないかと思います．

まず，災害に対して何もしなければ町や国，すなわち故郷ですね，自分の故郷，「兎追いしかの山」（今は，そういう世代が最近少なくなっているかもしれませんが），そういう町や国が滅んでしまう．「自分」ではなくて「自分たち」が根こそぎ滅んでしまうということをまず学ぶ．これが，防災まちづくり・くにづくり学習の第一歩だと思います．事実，3.11 では，そういう事態に追い込まれた，あるいはそういう事態に追い込まれつつあるまちがあるわけです．あるいは今回の土砂災害だったら，そこの集落全部が流されてしまいました．そういうことは，現実に起こりうるわけです．

そしてその上で，「まち」や「くに」を守るためには，みんなで守ることが大事なんだっていうことを肌感覚で学ぶ，ということが，教育目標になるのだと思います．防災教育が対象とした「生あるもの」とは，自分一人の人間，でしたが，防災まちづくり・くにづくり学習が対象とする「生あるもの」とは，一人の人間を越えた，私たちとしての「まち」や「くに」なわけです．

ですから，防災教育と，防災まちづくり・くにづくり学習とでは，ミクロとマクロのプロセスが違うだけで全く同じ構造にあるのだというふうに思います．

これを肌感覚で学ぶ．

要するに家族にしたって，友達関係にしたって，なにかこう，守らなあかんと思わなかったらどんどんどんどん崩れていくわけです．同じように，この地域を守るとみんなで思わなかったら，この厳しい自然環境の中で，全部流されていってしまう．そんな事を理解して，自然に流されないように，壊されないように努力を重ねていく，そうしたまちづくり，くにづくりを通して，「まち」や「くに」をつくる力，守る力つくる力を養うということを目指す，これが，防災まちづくり・くにづくり学習の目標だと思います．

今の現代人は生きる力もなくなっているから，わたしたちが，共に協力しながら生きていくという「まちづくり」「くにづくり」の力もなくなってきている．

そうやって，わたしたちの日本では，「故郷」がどんどんどんどん荒廃していって，どんどんどんどんなくなっていっています．これは社会科学教育学的に言うと，社会形成力とか，あるいはこれを公民的資質と呼んでいいかもしれませんが，そういう力を日本人がどんどん喪失していって，その結果として，社会が根底から溶解していっている状況といえるでしょう．そういう社会の溶解を食い止めるということが，哲学的な次元で言うところの防災まちづくり・くにづくり学習の目標ではないかなというふうに思います．

実際，例えば，高知の城西中学の宮田校長のお話では，学校をあげて防災教育を行い，生徒達による防災まちづくりの熱心な取り組みを始めたところ，「荒れた生徒達」も落ち着きを取り戻し，「ガラスを割る」という事を生徒達がしなくなっていった，ということが報告されています．これはつまり，防災まちづくり学習を通して，生徒達の「環境を破

壊する傾向」が減ったわけですよね．逆に言うなら，防災まちづくり学習は，（ガラスを割らないという消極的な格好ではありますが）「暮らしの環境を整える」という方向に，子供達の姿勢を変えることに成功した，という事がいえるわけです．こういう事こそが，防災まちづくり・くにづくり学習の目標じゃないかなというふうに思います．

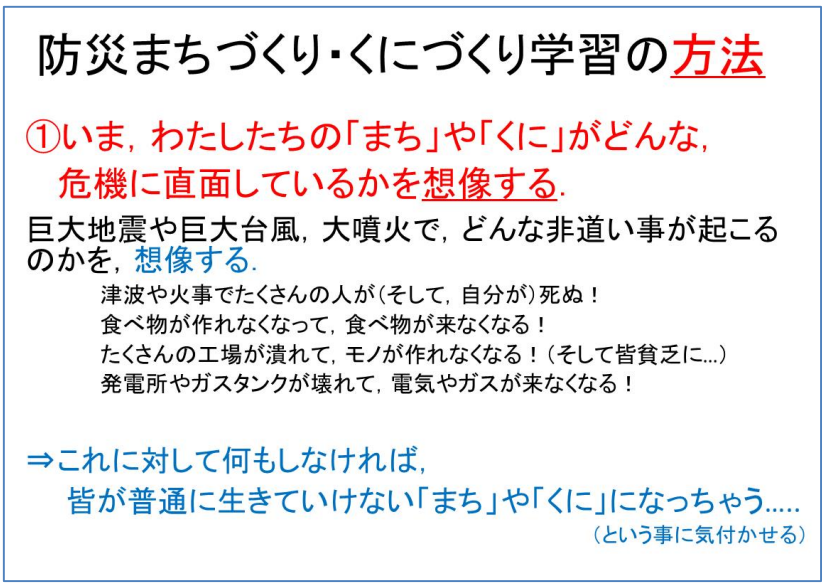

図２　防災まちづくり・くにづくり学習の「方法」（その１）

「防災まちづくり・くにづくり学習」の方法：想像する

では続きまして，防災まちづくり・くにづくりの「方法」についてお話したいと思います．この方法には，２つのステップがあると思います．

まず第１ステップは，今私たちの「まち」や「くに」がどんな危機に直面しているかを想像させる，というもの．もうちょっと分かりやすく言うと，どんなふうにして僕たちの町，国，故郷が潰れて滅びてなくなっちゃうのかを想像する．これが全ての出発点だと思います．例えば巨大地震や巨大台風，大噴火が来るとどんなひどいことが起こるのかを想像する．つまり，第１ステップの中心は，「想像する」ということです．

例えば，この図２は実は国土強靭化の行政の中で列挙されているものを分かりやすくまとめたものでありますけれど，本当は 45 の項目があるのですが，その中でも特に分かりやすい４つの項目を書いています．

一つ目は，津波や火事でたくさんの人々が，そして自分を含めて死んでしまうということですね．ひどいことが起こるというのは，たくさん死ぬということです．これだけで大変なことです．

二つ目は，食べ物がつくれなくなって，食べ物が来なくなる．例えば 3.11 の時，東京なんてたいして揺れなかったのですが，コンビニから水が全部なくなりました．みんなパ

ニックになって．これが首都直下地震なんかが起こったらもっとよりいっそう水がなくなってしまいますし，食料もなくなってしまいます．これは，体力の無い人達の中から餓死者がでてくることがあるかもしれない．なんでそうなるかというと，物流が動いてないからです．トラックが走れなくなる．しかもこれだけではなくて，工場が止まってしまう．パン工場，いろんな食品工場等が止まってしまう．これはなぜかと言うと，工場が被災するということは工場を動かすエネルギーが来ないといけませんが，大地震が起こると，エネルギーが止まってしまうのです．しかも，その工場に小麦粉を運ぶ道路も潰れてしまいます．要するに社会全体が機能麻痺しているので，食べ物も来なくなる，というわけです．我々はみんな忘れがちですけれども，口に何もいれない時間が続くと，健康を維持できず，最後は死ぬのです．今は，社会がちゃんとずっと守ってくれているから食べられるけど，その社会そのものが根こそぎ崩れるわけですから，大地震というのは．だから我々の生命維持ができなくなるかもしれない．

三つ目に，大地震が起こると，たくさんの工場が潰れて，ものがつくれなくなります．ものがつくれなくなっても別になにも問題ない，というものならいいのですが，東京や大阪や名古屋の大都市の工場が大地震で潰れたら，要するに僕たちが生み出すものがなくなって，結局，お金をみんな稼げなくなります．ということでみんな貧乏になります．首都直下地震が来ていろんな工場が潰れ，南海トラフ地震が来ていろんな工場が潰れたらみんな貧乏になります．今ふつうに食べているご飯とかパンとかが食べられなくなります．ということなのですね．

四つ目は，発電所やガスタンクが壊れて電気が流せなくなります．こう書くとですね，なんかこう寒い時は暖房がつけられずに寒いままになる，暑い時はクーラーつけれなくて困る，という「だけ」の話だとお感じになる方もおられるかもしれません．ですが，電気が来ない，ということは，私たちの社会に，深刻な弊害をもたらすのです．まず病院で人がバタバタ死にます．生命維持のための特殊な装置があって初めて生きている人達が，病院にはたくさんいるわけですが，電気が来ないとそんな装置が全て止まる，そして，結果，人がバタバタ死にます．それだけではありません．日本中の工場が全て，止まってしまいます．そしたら先ほど三つ目に申し上げた「ものがつくれなくなる」という事態が生ずる．さらに，二つ目に申し上げた「食べ物がこなくなる」という事態が生じます．つまりエネルギーというものがなくなると，社会は全然動かなくなってしまうのです．つまり，社会の土台にエネルギーがあるのです．

ということで，僕たち日本人は，近代人というものは，普通にこうやって生きているのがどれだけの人達の力で，今の社会が成り立っているのかをすっからかんに忘れて，ラーメン食ったり飯食ったり酒飲んだりしているわけです．

だからこそ，わたしたちは「ありがとう」と毎回言うべきなのです．

本当に「ありがとう」と！

そのお米が来るのにどれだけの方の努力が必要だったのか....それくらい思ってちょう

どなのだと思います，本当は.

日本人というものは，人間というものは．あるいは近代人というもの達は皆，そんな当たり前のことを忘れてしまっているのです，僕も含めてでありますが.....情けない．僕も含めてですけど.....ということをしっかりと理解する.

地震が起こったときに，私たちの社会がどうなってしまうのか，ということを想像すると，必ずここにたどり着くはずです．地震という有事を想像し，そこで何が起こるかを想像することができれば，日常の私たちの暮らしを支えている様々な人々の努力，先人達の努力の内実が，ありありと手に取るように見えてくるのです.

もちろん，大地震が起こった時にどうなるか，ということを，何の情報も無しに考えさせても，スグには気が付かないかもしれません．でも，今お話したことを，少しだけでも解説すれば，誰でもスグに分かると思います.

例えば，当方は今，地震が起こった時にどうなるのか，ということを，主な点４つについてしゃべったのは，たった6,7分くらいですけど，小学校3年生では分からないかもしれませんけど，6年くらいだったら今のスピードでも理解できた可能性は，あるのではないかと思います．６，７分が難しくても，もう少し時間をかければ，先ほどお話しした程度の事なら，子供でも十分想像できるのではないかと思います.

さらにですよ，中学校とか高校くらいであれば，今，政府でやっているようなことを「そのまま説明」しても，言葉さえ特殊なものを使わなければ，ほとんど分かるという事もあうのではないかと思います.

ぜひですね，多くの子供たちにそうした事を理解して頂きたい.

いずれにしても，理解してもらうことで，今，私たちが暮らしている，この社会の仕組みというものがふっと見えてくるのではないかと思います.

要するに，社会というものを理解するためには，それが壊れる「限界」を見いだすと，その「輪郭」が見えてくるわけです.

そしてこの「輪郭」を指し示すのが巨大災害なのです.

もちろん別のものとして戦争というものがあるのでしょうが，それを除けば，災害というものこそが唯一，私たちの社会のあり方を肌感覚で，理解する秀逸な切り口なのだと僕は思います．自分が生き残るのかということだけではなくて，社会の構造そのものを理解するためのもっとも秀逸な切り口，とりわけ，この平和な国家においては最も重要な切り口が，「災害」というものなのだと思います.

以上まとめますと，防災まちづくり・くにづくり学習というものは，自然災害に対して何もしなければ，わたしたちが普通に生きていけない町や国になるということに気付かせるわけです．これが国土強靭化の学習，あるいはまちづくり・くにづくりの，防災まちづくり・くにづくり学習の第一歩ではないかと思います.

そして，それは必ずできるのです.

適切な教材等々つくれば可能なはずです．だからこれからは，教材のあり方を是非，皆

さま方の知恵をお借りしながらつくっていきたいと思います．

防災まちづくり・くにづくり学習の方法

②「危機」を避けるために，どうしたら良いのかを考える．

・津波や火事でたくさんの人が（そして，自分が）死ぬ！
　⇒堤防つくる，建物を強くする，より安全な所に住む／転居する
　　逃げる方法を考えておく，助ける方法を考えておく

・食べ物が作れなくなって，食べ物が来なくなる！
・たくさんの工場が潰れて，モノが作れなくなる！
　⇒工場を強くする，道路・港を複数つくる，備蓄を増やす，
　　より安全な所に工場を移す，どれかが潰れても良い様にたくさんつくっておく
　　スグに元に戻す方法を考えておく

・発電所やガスタンクが壊れて，電気やガスが来なくなる！
　⇒発電所等を強くする，堤防をつくる，より安全な場所に移す，
　　どれかが潰れても良いようにたくさんつくっておく
　　スグに元に戻す方法を考えておく

⇒一番大切なのは，こういうことを，普段から，皆で考え，
　みんなができることを，少しずつやり続けること！（という事に気付かせる）

図３　防災まちづくり・くにづくり学習の「方法」（その２）

「防災まちづくり・くにづくり学習」の方法：対策を考える

次に，こうして想像した「最悪事態」に対してどうするのか，ということを考えます．これが，防災まちづくり・くにづくり学習の第二ステップです．

その概要は，この図３に示した通りですが，もちろん，先に図２に示した，わたしは「何が起こるのかを想像する」ことが全ての出発点となることは間違いありません．その想像が無ければ，対策など考えようがないからです．さらに言うなら，「想像」さえできていれば，後は，少しずつ知識を増していけば，自ずと対策が明確になっていく，ということも言えるからです．

とはいえ，やはり，どれだけ何が起こるのかを想像できていたとしても，不十分な知識しかなければ，適切な対策を講ずることができず，結果，わたしたちのまちもくにも，脆弱なまま放置されることになります．ですからやはり，この「第二ステップ」もまた，当然ながら，大切な役割を担います．

事実，ここで教える内容こそが，「国土強靭化」と呼ばれる，今，政府が進めている取り組みの内容そのものになるからです．つまり，ここで教える内容こそが，防災まりづくり・くにづくりの内容はとなるわけです．

では，ここについてどうやって教えていくか，ということですが，例えば中学生や高校生くらいだったら何も情報を与え，授業の中でずずっと考えさせるということがありますよね．ずっと考えさせてどんどんまとめていくというやり方です．もちろん，必要に応じ

て，その流れを観ながらその時々にヒントをいくつか出していくというやり方です．

もちろん，時間が限られていたり，あるいは，小学生くらいなら，やはり，教諭の側から様々な取り組みを教えていく，という方法もあり得ます．

後はカリキュラムの組み方によって，「考えさせる要素」と「教える要素」の間のバランスをどの様に調整していくか，ということを，現場や対象の学力などを踏まえながら考えていく，ということが肝要かと思います．

では，「どの様に備えていけば良いのか」というこの第二ステップについて，先ほど説明しました４つの「最悪事態」のそれぞれについて，簡単に解説いたしましょう．

まず，一つ目の「津波や地震でたくさんの方々の命が失われる」という事態に対しては，堤防をつくる，建物を強くする，より安全なところ（例えば，高台とかに）住む，あるいは転居する，等が考えられます．

こうした，いわゆる「ハード対策」に加えて，逃げる方法を考えておく，あるいは助ける方法を考えておく，そいう「ソフト対策」もあげられます．これらの対策はいずれも当たり前の事ではないかと思いますし，当然，子供に教えるのも，それほど難しくないのではないかと思います．あえて，難しい言葉を使わなくても，子供達が分かる言葉で，十分教えられるのだと僕は想像します．

さて，次に，「食料が来なくなる」「モノがつくられなくなって，皆が貧乏になる」という問題に対しては，要するに，まずは，工場や道路がつぶれないようにすることが大切です．でも，それも完璧にはできない．だから，潰れても別のものがある，つまりバックアップ，と言う奴をつくっておくことも大切です．

例えば，道路や港を複数つくっておく．これは複数つくっておくと，モノをどうにかして運ぶことができるようになる．1 個が潰れても，もう一つが生き残っていたら，モノが運べるわけです．もちろん，一つ一つの道路や港を「強くする」ということも大事ですが，それに加えて，「複数つくってく」ということも大切なわけです．

あるいは，備蓄を増やすことも大切です．食べ物をそれぞれの家の中で，3 日分くらい置いておけば，当座は凌ぐことができる，ということになります．

さらには，「より安全なところに工場を移す」ということも大切です．そして，先ほどと同様に，どれかが潰れてもいいようにたくさんの工場をつくっておく，ということも大切です．これらは皆，どれもこれも当たり前の事ですよね．

さらに，「すぐにもとに戻す方法を考えておく」ということも大切になります．このときに大事なのが，自衛隊などの救援部隊が，スグに被災地に入ってくる，ということですが，実は，そういう救援を行うにあたっては「地域の建設業」の方々が，大変重要な役割を担います．

例えば 3.11 の時，自衛隊が非常に活躍したとよく知られておりますけど，自衛隊が活躍できたのは，「道路が通ったから」です．そしてその道路を誰が通したかと言うと，地方建設の国土交通省だと言われておりますけれども，実際にあそこでいろいろと重機を動

かしていたのは「地域の建設業者」だったのです．地域の建設業者はどこから来たかと言うと，東京にあるような大きな建設会社ではありません．それぞれの地域で，ふつうに生業として建設業をやっておられた方々がその地域が緊急事態に陥った時には，「地球防衛軍」みたいな形で，救援部隊を編成して，救援に入るんですね．そうした建設業者さん達が全然いなかったら，被災地の状況を誰も，どうにもできなくなってしまう．道を通すこともできず，自衛隊も入ってなくて，人がバタバタもっと死んでいたのです．同じような事は，大雪の時でも，広島での土砂災害の時でも，洪水の時でも，皆同じです．結局，民間の建設業者の力がなければ，誰も，どうすることもできないのです．大きな石や大量の土をどかして，人を救うためには，どうしても大きな機械が必要で，だから，それを持っていて，動かす事ができる人達が，それぞれの地域にいなければ，どうしようも無くなるのです．

「スグに助ける」ということの大切さを理解してもらうためにも，例えばこういう一例を教えておくことも必要ではないかと思います．

最後に，「発電所やガスタンクが壊れて，電気やガスが来なくなる」という，この事態を避けるためには，まずは，発電所を強くしたり堤防をつくったり，より安全な場所に移したり．どれかが潰れてもいいようにたくさんつくったり，あるいはすぐにもとに戻す方法を考えておく，というこうした取り組みが必要ですね．

「防災まちづくり・くにづくり」における四つの基本的な考え

この様に，災害に立ち向かうためには，ありとあらゆることを考えないといけない，という態度が必要で，だから，防災まちづくり・くにづくり学習では，そんな「態度を養う」ことが必要だということになります．例えば，強靭化といえば，「結局，堤防をつくったらいいだけだ，なんて思ってるだろ！」などと言われることがしばしばありますが，そんな訳は決してないのです．堤防だけをつくったらいいというものではなく，先ほどお話ししたような，あらゆる対策を考えいかなければならないのです．

こうした対策の考え方をまとめれば，何が起こるのかを十分に想像した後，おおよそ，次の四つの考え方に整理できるかと思います．

（１）一つ一つを強くする．

（例：耐震補強，堤防を高くする）

（２）壊れない所に移動させておく．

（例：津波が来ない高台に家を移転，地震が来ないところに発電所を移す）

（３）一部が壊れても，全てが壊れないようにするために複数つくっておく

（例：非常階段をつくる，道路をもう一つ作る，発電所を複数作っておく）

（４）スグに助けに行けるようにする

（例：救援部隊を作っておく，それぞれの地域の建設業を守る）

つまり，危機への備え方には，いろんなフェーズで考えられるわけですね，

だから兎に角，大きな地震や津波，洪水に対して，僕たちにできることは山のようにある，ということを分かってもらこと，あるいはそうした事実に「気付いてもらう事」が，子供たちの生きる力，まちをつくる力をつくっていくのだと思います．

とにかく，防災まちづくり・くにづくり学習で一番大切なのは，こういうことを「普段」から「皆」で考えて，皆ができることを少しずつ「やり続ける」ということです．地震が起こった直後だけではなくて，こういうことをずっと粛々とやり続けることが大事なんだな，ということに気付かせる．これが，防災まちづくり・くにづくり学習の肝じゃないかなと思います．

普段から，皆で考え続けることが「防災まちづくり・くにづくり」の基本

以上，ステップ１，ステップ２という段階から構成される防災まちづくり・くにづくり学習の「方法」をお話致しましたが，以上にお話したのは，文字通り，「防災まちづくり・くにづくり」の取り組みそのものを意味するものです．

さらに言いますと，今，中央政府と，地方自治体で取り組んでいる「国土強靱化」と呼ばれる行政のプロセスそのものであるとも言えます．

行政用語で言いますと，第一段階として「脆弱性評価」をやり，第二段階としてそれに基づいて「国土強靱化基本計画」を立てる，という取り組みを行っていますが，その前者の「脆弱性評価」とは要するに，第一ステップである「何が起こるかを想像する」という段階に対応するもので，後者の「国土強靱化基本計画」というものは，最悪の事が起こらないようにあれこれと考えて，それを一つにまとめたものを言うものなのです．

ですから子供たち１人１人に「国土強靱化計画」，あるいは高知強靱化計画とか和歌山強靱化などの，いろんな地域の「強靱化計画」を，子供たち１人１人それぞれの暮らしのもとに考えてもらう，というものが「防災まちづくり・くにづくり学習」なのだ，と言うこともできるわけです．

そしてそうした防災まちづくり，防災くにづくりに子供達に主体的に関わってもらうことで，子供達の「まち」をつくる力を育む事ができるのではないかと思います．

そもそも「まち」とは「皆で生きる場」を意味します．そんな場をつくるというのがまちづくりなわけですから，結局は，「まちをつくる力」というのは，実は，「皆で生きる力」と言うことができるでしょう．

ちなみに，一言だけ申し上げると，ゲーテの代表作『ファウスト』のラストシーンは，このテーマを取り扱ったものとなっています．ゲーテのファウストっていうのは，ファウストという学者が「美しいものを見せてくれ」と悪魔メフィストフェレスに頼みます．そして，本当に美しいものを見せてくれたら「時間よ止まれ！お前は美しい！」と叫び，それを叫べば，悪魔に魂をくれてやる，という契約を結びます．

その契約後，何十年も様々な，あらゆる「美しいもの」を見せられるのですが，ファウストは満足できません．ですが，ファウストの晩年，年老いた時に彼はついに，なんて美しい，これこそ人類の最高の美だ，と感ずるものを目にし，そしてついに「時間よ止まれ！お前は美しい！」と叫ぶのです．

その時，ファウストが見たものとはなにかと言えば，それは，人々がみんなで協力をして行う土木の姿，さらに言うなら「防災まちづくり」をやっている姿だったのです．この荒々しい自然の中で，自分達が暮らしていくまちをつくるために，堤防を築き，自分達が暮らす土地を作りあげるその姿だったのです．

お分かり頂けますでしょうか．

要するに，ゲーテのファウストが言いたいのは，皆で協力して，大自然の中で自分達の暮らしの住処を作り挙げる土木の姿，防災まちづくりの姿こそが，どんな宝石よりも恋愛よりも芸術作品よりも人間のなし得る全ての行為の中で最も美しい姿なのであり，それには，どれだけ美しい夕日であろうが風景であろうがモーツァルトの音楽であろうが，何ものも優ることはできない――ということだったのです．そしてそのことが，ヨーロッパの歴史の中でも最大の知の巨人と言い得るゲーテの最終的な結論だったのです．

そんな風にしてファウストがたどり着いた，あるいは，知の巨人ゲーテがたどり着いた地点に，子供たちをそれぞれの教師の力で引き揚げてやること――それこそが，「防災まちづくり・くにづくり学習」の神髄だと言うこともできるのではないかと思います．

そしてそんな風にして一人一人の子供達を，防災，という切り口で引き上げてあげることができれば，日本がどれほど強い国，美しい国につくっていくか分からないくらいなのではないかとすら，思います．

だからこそ，防災まちづくり・くにづくり学習というのは，全国で展開していくことに最大級の意味があるのではないかと，私には思えてなりません．

ですから是非とも，具体的に，どのように防災まちづくり・くにづくり学習を進めていくべきなのか，その具体的な内容を，是非とも，現場の先生方の力，教育学の先生方の力をお借りしながら，作り挙げていきたいと思っております．

以上で，本日の私の，防災まちづくり・くにづくり学習についてのお話を終わりたいと思います．

どうも，ありがとうございました．